

豊作を言祝ぐ詩

——「喜雨」詩から「喜雪」詩へ——

矢嶋 美都子

一 はじめに

中國の古典詩には自然の風物や現象が様々な場合に於いて描かれている。とりわけ雨や雪は古來詩の素材として多方面から詠じられ、その詩題も多種多様である。こういった中に歌う内容を特定する特殊な詩題がある。「喜雨」と「喜雪」がそれである。「喜雨」詩は六朝時代に宮廷詩人的立場の詩人によって早愆の時に歌われた、降雨を喜び豊作を言祝ぐ詩である。本稿ではこの「喜雨」詩が唐代になって變化し、それにつれて出現した降雪を喜び豊作を言祝ぐ「喜雪」詩に着目し考察してみた。

二 「喜雨」詩について

(一) 六朝時代の「喜雨」詩

「喜雨」詩は魏の曹植の「喜雨」詩を嚆矢として北周の庾信の二首の「喜雨」詩まで、宮廷詩人的立場の詩人によって詩題とその詠じる内容を變えずに歌い繼がれた一種の特殊な雨の詩群である。六朝時代の「喜雨」詩を一覽表にすると表の如くなる。逸欽立の『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局）に據る。以下同じ。

豊作を言祝ぐ詩

表① 「喜雨」と題された詩

魏	曹植	「喜雨」序
宋	謝莊	「喜雨」（闕文）
宋	謝惠連	「喜雨」
宋	鮑照	「喜雨」奉敕作
齊	謝朓	「賽敬亭山廟喜雨」
梁	庾肩吾	「從駕喜雨」
北齊	魏收	「喜雨」
北周	庾信	「奉和趙王喜雨」「和李司錄喜雨」

「喜雨」詩には、歌い込まれる事柄、内容構成にある一定の型が形成されており、それらを整理すると次のA B C Dの四項目になる。

A、天（天子）の徳を稱える表現

B、雨が降る豫兆

C、雨が降っている様子

D、秋には良い穀物が收穫されるだろうという五穀豊穰を言祝ぐ表現

この四項目は、例えば魏の曹植の「喜雨」詩では、次のように歌い込まれている。

天覆何彌廣 天の覆うこと何ぞ彌く廣し

苞育此群生 此の群生を苞育する

乘之必憔悴 之を乗つれば必ず憔悴し

惠之則滋榮 之を恵めば則ち滋榮す

慶雲從北來 慶雲北より來り

鬱述西南征 鬱述として西南に征く

時雨中夜降 時雨 中夜に降り

長雷周我庭 長雷 我が庭を周る

嘉種盈膏壤 嘉種膏壤に盈ち

登秋畢有成 登秋 畢く成る有り

最初の四句はA・天(天子)の徳を稱える表現。五六句目はB・雨が降る豫兆。次の二句はC・雨が降っている様子。最後の二句はD。

嘉種は『詩經』大雅・生民に「誕降嘉種」とあるのを踏まえる。なお、この詩には次の序文が付いている、「太和二年大旱、三麥不收、百姓分爲飢餓」(『北堂書鈔』卷一五六、凶荒篇の三麥不收の注)。

表①の作品は多少の例外はあるが、いずれもこの四項目を骨子に構成されている。例えば鮑照の「喜雨」詩を見ると十八句あり、六句目まではB、次の八句はC、最後の四句で

關市欣九賦 關市九賦を欣び

京廩開萬箱 京廩萬箱を開く

無謝堯爲君 堯の君爲るに謝す無くんば

何用知柏皇 何ぞ用いん柏皇を知るを

という。關市と京廩の句はDの變形で、實りの秋にはよい穀物が收穫できて、租税も收められ、都のつまり政府の米藏も一杯になるだろ、という。最後の二句はA。或は庾肩吾の「從駕喜雨」詩を見ると

西岳浮樽桂 西岳 桂を樽にして浮かべ

東皇事浴蘭 東皇 蘭に浴すを事とす

赦詔還京兆 赦詔して京兆に還れば

歸神出灌壇 歸つて神は灌壇を出づ

濕風含酒氣 濕風 酒氣を含み

陰氣助麥寒 陰氣 麥寒を助く

典農欣受職 典農 職を受くるを欣び

治粟喜當官 治粟 官に當るを喜ぶ

復此隨車雨 復は此れ車に隨う雨

民天知可安 民天安んず可きを知る

最初の二句は、雨乞いの祭りに天子が巡幸したことを言う。謝朓の「賽敬亭山廟喜雨」詩の「秉玉朝群帝、樽桂迎東皇」の句を意識し、

『楚辭』九歌・東皇太一の「奠桂酒兮椒漿」、同じく雲中君の「浴蘭湯兮沐芳」も踏まえる。三四句目は、B・雨の豫兆。三句目の赦詔は大赦の詔。當時は早魃は刑罰が妄りに加えられた時に起こると考えられていたから大赦の詔を發して即ち早魃對策を講じて歸京した、と言う。四句目の灌壇の句は、太公望呂尙が灌壇令になった時に文王が見

た夢の話に據る。
婦人當道夜哭、問之、吾是東海神女、嫁于西海神童、今灌壇令當道、廢我行、我行必有風雨、而太公有德、我不敢以暴風雨過、是毀君德、

〔博物志〕吳闞

東海の神女が西海神童に嫁入りする途中の灌壇で道に當たつて泣いている。その譯を問うと「灌壇令が道に當たつているので、私は行かないことにした、私が行けば必ず大風雨が有る。暴風雨で過ぎることは太公望の徳を毀つことになるので行くわけにいかないのです」とい

う。歸神は（西海神童に）歸す（嫁ぐ）東海神女。彼女が灌壇を出たというのは大風雨が有ることになる。

五六句目はC。『神仙傳』の樂巴が朝廷の正月元旦の大宴會の時、下賜された酒を西南の方に吹き出し、成都に雨を降りして火事を消したがその雨は酒臭かった、という話を踏まえる。また魏の曹植の「喜雨」詩の「慶雲從北來 鬱述西南征」の句も意識していると思われる。七八句目はDの變形で、實りの秋にはよい穀物が收穫できて、租税も收められ擔當の役人もほっとするだろう、と言う。典農と治粟は官職名の略記。九句目は「甘雨隨車」の成語で知られるが、後漢の百里崇が刺史になった時、早天の地方を経れば必ず甘雨が降った故事を踏まえる。天子が行幸して甘雨が降ったから、十句目、民天（食料）は安心だと、言う。最後の二句はA。

次に北齊の魏收の「喜雨」詩は十二句あり、最初の二句はB、次の六句はC、最後の四句で

氣調登萬里 氣調して萬里登り

年和欣百靈 年和して百靈欣ぶ

定知丹甌出 定めて知る丹甌の出づるを

何須銅雀鳴 何ぞ須いん銅雀の鳴るを

という。氣が調い、年が和して豊作となり瑞祥が出現するのは天子の徳が高い證しであるからA、同時に五穀豊穰を示す瑞祥も出現しているのもDでもある。十一句目の丹甌は『宋書』符瑞志に「丹甌、五穀豊熟則出」とあって豊作を示す瑞祥。十二句目の銅雀が鳴るのも豊作を示す瑞祥。『三輔黃圖』建章宮に「長安城西有雙闕、上有雙銅雀、一鳴五穀成 再鳴五穀熟」とある。次に庾信の「奉和趙王喜雨」詩を見ると十四句ある。

豊作を言祝ぐ詩

文霓臨日谷 文霓 日谷に臨み

封巖對雲臺 封巖 雲臺に對す

投壺欲起電 投壺 電を起さんと欲し

倚柱稍驚雷 柱に倚りて稍や雷に驚く

白沙如濕粉 白沙 濕粉の如く

蓮花類洗杯 蓮花 洗杯に類す

驚鳥洒翼度 驚鳥 翼に洒いで度り

濕雁斷行來 濕雁 行を斷ちて來る

浮橋七星起 浮橋 七星起り

高堰六門開 高堰 六門開く

猶言祀蜀帝 猶お言ひ蜀帝を祀ると

卽似望荆臺 卽ち似たり荆臺に望するに

厥田終上上 厥の田終に上上

原野自莓莓 原野自ずと莓莓たらん

最初の四句はB、次の六句はC。次の二句は、（雨が降ったのは）、蜀帝を祭った（雨乞いをした）お陰と言うのは、荆臺（高唐賦）の陽臺で柴を燒いて山川の神を祭ったお陰かもしれない、つまり天子の早魃對策が功を奏したと、その徳を稱える句でA。最後の二句はD。好い雨が降ったので田畑は肥沃な最上のものでなり原野も青々とした草が生えるだろう、つまり五穀豊穰が大いに期待出来る、という。この詩はA B C Dの四項目を歌い込んで「喜雨」詩の典型を成す。

以上、「喜雨」詩は魏の曹植以後、A B C Dの四項目を歌い込むのを基本型にして、典故や用語の面で前代の詩人の作品を意識して新味を加えつつも詩題と内容を變えずに歌い繼がれて來たと分かる。雨に

對する認識も農事によいもの、國家安泰の基盤となる五穀豊穰を期待させるもの、で共通している。

因みに六朝時代に於ける「喜雨」詩以外の雨を詩題に持つ詩とそこに示された雨に對する感慨、認識を見ると次の如くである。

(二) 六朝時代の雨の詩と雨に對する認識

「喜雨」詩以外に雨を詩題に持つ詩を一覽表にすると表②の如くなる。

表② 「雨」と題された詩（詩題に雨があつても、詩中で雨に言及してない作品、例えば陶淵明の「連雨獨飲」等は擧げない）

魏	阮瑀	「苦雨」
西晋	傅玄	「苦雨」〔無題〕
西晋	傅咸	「愁霜詩」
西晋	張載	「霜雨」
西晋	張協	「苦雨」〔雜詩〕十首其十
東晋	曹毗	「霜雨」〔闕文〕
宋	鮑照	「苦雨」
齊	謝朓	「觀朝雨」〔祀敬亭山春雨〕
梁	簡文帝	「賦得入階雨」〔行雨〕〔雨後〕
梁	元帝	「細雨」
梁	沈約	「庭雨應詔」
梁	江淹	「張黃門協苦雨」〔雜體三十首〕
梁	何遜	「春暮喜晴酬袁戶曹苦雨」
梁	劉孝綽	「秋雨臥疾」
梁	劉孝威	「和皇太子春林晚雨」〔行還值雨又爲清道所駐〕〔望雨〕
梁	劉苞	「望夕雨」

梁 虞騫 「擬雨詩」

梁 朱超 「對雨」

陳 陰鏗 「閑居對雨」、又、と一首あり二首。

陳 張正見 「賦得梅林輕雨應教」

北周 庾信 「對雨」

北齊 劉逖 「對雨」

隋 諸葛穎 「賦得微雨東來應教」

この表に擧げた二九首に見る雨に對する感慨・見方を整理すると凡そ次の六分類できる。

一、行旅が困難（旅愁）。二首

二、友達と往來（宴會等）出來ない。五首

三、物價が上がる、生活苦、清貧。三首

四、雨景描寫、雨に纏わる典故の面白さ十一首

五、その他 五首

六、陶淵明を意識して農事に言及する、三首

一に分類される詩。

魏の阮瑀の「苦雨」

客行易感悴、我心摧已傷

梁の何遜の「春暮喜晴酬袁戶曹苦雨」

春芳空稅目、游客反傷情

二に分類される詩。

西晋の張載の「霖雨」

何以解愁懷、置酒招親類
宋の鮑照の「苦雨」

川梁日已廣、懷人邈渺漫

徒酌相思酒、空急促明彈

梁の江淹の「張黃門協苦雨」

高談玩四時、索居慕疇侶

梁の劉苞の「望夕雨」

清樽久不薦、淹留遂待君

梁の朱超の「對雨」

無因假輕蓋、徒然想上才

三に分類される詩。

西晋の傅玄の「苦雨」

炊爨不復舉、竈中生蛙蝦

西晋の傅咸の「愁霖詩」

蘭桂踐朽腐、柴粟貴明珠

西晋の張協の「苦雨」

尺蠖重尋桂、紅粒貴瑤瓊

四に分類される詩。

東晋の曹毗の「霖雨」(闕文、四句のみ)

齊の謝朓の「祀敬亭山春雨」(聯句で四句)

梁の簡文帝の「賦得入階雨」(六句)、雨を美しく詠じている。

細雨階前入、灑砌復沾帷

漬花枝覺重、濕鳥羽飛遲

豊作を言祝ぐ詩

儻令斜日照、併欲似遊絲

「行雨」(四句)、巫山の神女の典故が見所。

本是巫山來、無人覩容色

唯有楚王臣、曾言夢相識

「雨後」(六句)、闕文と注がある。

散糸與山氣、忽合復俄晴

雷音稍入嶺、電影尙連城

雨餘稍雲薄、風收熱復生

梁の元帝の「細雨」(四句)。

風輕不動葉、雨細未霑衣

入樓如霧上、拂馬似塵飛

梁の沈約の「庭雨應詔」、八句。

梁の虞騫の「擬雨詩」、八句。

梁の劉孝威の「和皇太子春林晚雨」十二句

陳の張正見の「賦得梅林輕雨應教」八句。

梁の劉孝威の「望雨」、十六句。

この五首は簡文帝や元帝の雨の詩と同様の美しい雨景描寫に終始した詩。

五に分類される詩。

齊の謝朓の「觀朝雨」(十六句)、朝出仕を待ちながら雨を詠じて、

隱居したいと言う。

方同戰勝者、去翦北山萊。

梁の劉孝綽の「秋雨臥疾」(八句)、高臥して暇だと述べ、雨の様子

を詠じた詩

梁の劉孝威の「行還值雨又爲清道所駐」(三十句)、道中描寫、雨景描寫の後、最後の四句で大志を述べて結ぶ。

徒抱凌雲志、終愧摩天翔

安能久淪辱、圖南會有方。

北齊の劉逖の「對雨」(八句)、雨景描寫の後、雨に濡れても山の中に居ようと結ぶ。

無由似玄豹、縱意坐山中

北周の庾信の「對雨」詩(後述)

六に分類される詩

陳の陰鏗の「閑居對雨」其一(十句)

四溟飛且雨、三徑絕來遊

……六句雨景描寫略……

寄言一高士、如何麥不收

最後の二句で、高士に麥の收穫についてどうして麥が收穫出来ない事があるのか、と言を寄せている。この高士は、詩題の閑居、詩中の三徑の語から陶淵明を意識していると推察される。陶淵明に麥の用例は一つ。「有會而作」に

菽麥實所羨、孰敢慕甘肥

とある。しかし古來の農諺に「麥收三月雨」(麥は三月に雨が降れば收穫出来る)、「麥收三八十場雨」(麥は三・八・十月に雨が降れば收穫出来る)とあり、麥の收穫はそう困難なことではなかったと思われ、この句は「高士」を少し揶揄した表現と見られる。こういった口吻は、「閑居對雨」其二(十二句)にも見える。

……八句省略……

嘉禾方合穎 秀麥已分岐

寄語紛綸學 持筆(竿)詎難(必)知

最後の二句でやはり紛綸の學に語を寄せる構成。良い稻や麥も豊作を示しているが、博學が隱居して學問ばかりしてはこういった事は分らないだろう、という。紛綸の學は、後漢の井丹、字大春。『後漢書』逸民傳の井丹の本傳に

故京師爲之語曰「五經紛綸井大春」

とあり、その紛綸の注に、猶浩博也とある。

次に隋の諸葛穎の「賦得微雨東來應教」は陶淵明の「讀山海經」其一の「微雨從東來、好風與之俱」の句に基づく八句の詩。六句で微雨や風の皴景をして最後二句で、

登年隨玉燭、名山定可封

と結ぶ。登年(豊年)は玉燭(四時の氣候が調和すること)に隨うものだから、名山に天をお祭り出来るだろう。

六に分類した陰鏗と諸葛穎はどちらも、雨と農事を關連付けて詠じるのに陶淵明を據り所にして、という共通点がある。「喜雨」詩は豊作を言祝ぐ詩で農事に言及しているが陶淵明の影響は見られない。

以上、六朝時代の「喜雨」詩以外の雨と題された詩は、詩題も詠じる場面・内容も様々であり、また雨を美しい詩の素材として歌うという特徴が看取できる。そして共通している事は一〇五に見た二四例のように全く農事に觸れないか、或は觸れるにしても六に見たように田園詩人・陶淵明に纏わるものであると分る。こう見て来ると詩題と詠じる内容を變えずに歌い繼がれた「喜雨」詩は、その他の雨の詩とは明確に一線を畫しており、六朝時代に「喜雨」という詩題は歌う内容

を特定する特殊な詩題になつていたと見て良いと思われる。ところが、「喜雨」詩は唐代になつて次に見るようになつて變化するのだが、六朝時代の末に「喜雨」と詩題に付けないで「喜雨」詩の内容を詠じた庾信の「對雨」詩が出現した。この詩は六朝時代の「喜雨」詩と唐代の「喜雨」詩の橋渡しの意義があると思われるので、唐代の「喜雨」詩を検討する前に概略しておくことにする。

(三) 庾信の「對雨」詩について

庾信の「對雨」詩は次の如くである。

繁雲猶暗嶺 繁雲 猶お嶺を暗み
積雨未開庭 積雨 未だ庭を開かず
階含侵角路 階は含みて角路を侵し
鏡滿溜疏萍 鏡は滿ちて疏萍溜る

濕楊生細榼 濕楊 細榼を生じ

爛草變初螢 爛草 初螢に變ず

徒勞看蟻封 蟻封を看ること徒勞なれば

無事祀靈星 靈星を祀るを事とする無し

一二句目は長雨が續いている、といい、三四句目は雨の情景描寫、後半四句は長雨に對する感慨という内容構成。注目されるのは五六句目の對句で、表面的には雨に濡れた楊に細い榼(きのこの類)が生え、爛草はピカピカ光る螢に變わる、と美しい雨降り的情景描寫。しかし、五句目は實は瑞祥をいう。この榼は『後漢書』五行志に

獻帝興平元年九月、桑復生榼、可食(獻帝の興平元年九月に、桑復たを榼生ず、食す可し)

とあり、梁の劉昭の注に次のように言う。

桑重生榼、誠是木異、必在濟民、安知非瑞乎、時蒼生死敗、……食

豊作を言祝ぐ詩

此重榼、大拯危命、雖連理付枝、亦不能及(桑重て榼を生ず、誠に是れ木の異なり、必ず民を濟うに在り、安ぞ知らん瑞に非る乎や、時に蒼生死敗す、……此の重榼を食て、大いに危命を拯う、連理付枝と雖も、亦た及ぶ能ず)

また六句目の螢も『禮記』月令に

季夏之月、腐草爲螢

とあり、季節の巡りが順調であることを示す。つまりこの對句は、美しい雨景描寫と同時に食べられる瑞祥の榼も生じているし、季節の巡りも正しいので農事は心配なからう、という庾信の感慨も表現しているのである。だから、七八句目はもう五穀豐穰を祈念する雨乞いの必要もなからう、という。七句目の蟻封は『東觀漢記』の「蟻封穴戸、大雨將至」を踏まえる。八句目の「祀靈星」は后祿を祠つた靈星祠をお祭りする、或は靈星は天田星(稼穡を司る)でこの星祭りをする意味であるが、いづれにしても農事の發展、五穀豐穰を祈念する雨乞いをする。『後漢書』祭祀志に次のように言う。

漢興八年、有言周興而邑立后祿之祀、於是高帝令天下立靈星祠、言祠后祿而謂之靈星者、以后祿又配食也、舊說、星謂天田星也……(漢興りて八年、周興りて而るに邑に后祿の祀を立つと言ふもの有り、是に於いて高帝天下に令じて靈星祠を立てしむ、后祿を祠るを言て而るに之を靈星と謂うは、后祿を以て又た食を配すればなり、舊說、星は天田星を謂うなり)

后祿は古代の農事を掌る長官。靈星祠は『三輔黃圖』に「長安城東十里、有靈星祠」とあり、長安に在ったと思われる。

「對雨」詩の後半四句から、雨に對して農事に良いもの、國家安泰の基本である五穀豐穰に有用なものといった「喜雨」詩に通じる認識

が窺える。ここに見る雨に對する社會性を帯びた爲政者が持つような公的な視點は、先に見た六朝時代の「喜雨」詩以外の雨を詩題に持つ詩に示された視點と大いに違っている。庾信が雨に對してこういつた見方をするようになった理由は幾つか推定されるが、後半生を送った北朝（西魏・北周）の乾いた氣候・風土の影響が先ず挙げられる。『周書』卷五・武帝紀を見ると在位十八年の間に旱魃は次の記事の如く發生している。

保定元年七月 詔曰、亢旱歷時、嘉苗疹悴：

保定二年二月 以久不雨、降宥罪人、京城三十里內禁酒

四月 禁屠宰、旱故也。

三年四月 大雩

五月 避正寢不受朝、旱故也。甲戌雨。

天和元年四月 雩

建德元年五月 帝以大旱、集百官於庭、詔之曰：公卿各引咎自責。其

夜澍雨。

建德二年七月 己巳、祠太廟、自春末不雨、至於是月、壬申、集百寮

於大德殿、帝責躬罪己、問以治政得失、戊子、雨。

三年七月 京師連雨三旬、是日霽。

五年七月 京師旱。

この「旱」の記録の多さは當然豫想されることであるが、南朝の各帝紀の記事と比較して見ると格段に多い。例えば、在位五十年、庾信が前半生を過ごした梁朝の武帝紀（『梁書』卷一（三））を見ると次の如くである。

天監元年、是歲大旱、米斗五千、人多餓死

三年三月、隕霜殺草。

六年三月 隕霜殺草。

八月 京師大水因壽入、加御道七尺

十二年四月 京師大水

普通二年三月、大雪、平地三尺

中大通二年四月 大雨雹

五年五月 京師大水、御道通船。

大同三年六月 青州胸山境隕霜。

七月 青州雪、害苗稼。：是歲饑。

十年十二月、大雪平地三尺

早魃の記録は天監元年だけで、大水や季節外れの霜や雪の害の記録が多い。

『周書』武帝紀の旱魃の記事から旱魃は天下の重大事であり天子も臣下も必死にその對策を講じていたことが窺える。庾信は北遷後、囚われの臣、羈旅の臣ではあるものの北朝（西魏・北周）で文學の臣として優遇され、高位を得て活躍した宮廷詩人であった。だから北朝の乾いた氣候・風土と特に北周の武帝の厳しい政治態度の下にあっては、雨に對する見方も自然に國家安泰の基盤である五穀豐穰を齎すものといったふうになったと思われる。この庾信の「對雨」詩が唐代の豊作を言祝ぐ詩にどの様な影響を及ぼしているか次に検討してみる。

三 唐代の「喜雨」詩

唐代になると先ず「喜雨」詩は凡そ次の三種類に分岐した。

一、傳統的な「喜雨」詩を繼承するもの。（旱魃の時に、宮廷詩人的な立場の詩人が降雨を喜び豊作を言祝ぐ）

二、早魃とは限らず雨を喜び農事にもよい雨だと詠じるもの。

三、農事に關係なく單に雨を喜ぶもの。

一に分類される作品。『全唐詩』（中文出版社、復興書局印行）に據る。以下同じ。

張九齡 「奉和聖製喜雨」（四言二十六句）

「和崔尚書喜雨」（五言二十句）

李嶠 「晚秋喜雨」（五言三八句）並序

文宗 「暮春喜雨詩」（注、開成元年三月觀內人賽雨賦）

* 一の變形、地方の役所での作品

杜甫 「白水明府舅宅喜雨」（五言律詩）

皎然 「同薛員外喜雨詩兼上楊使君」（五言十六句）

耿章 「賀李觀察禱河神降雨」（七律）

二に分類される作品

李嶠 「春日遊苑喜雨應詔」（五律）

戴叔倫 「喜雨」（五言十四句）

白樂天 「喜雨」（七絶）、「喜雨」（五言二十句）

三に分類される作品

李嶠 「奉和春日遊苑喜雨應制」（五律）

玄宗 「同劉冕喜雨」（五律）

張說 「奉和聖製同劉冕喜雨應制」（五律）

魏知古 「奉和春日途中喜雨應詔」（五言十句）

杜甫 「喜雨」（五律）「春夜喜雨」（五律）

錢起 「蘇端林亭對酒喜雨」（五律）

豊作を言祝ぐ詩

一、二、三の分類表から、所謂の傳統的な「喜雨」詩は張九齡と李嶠の作品だけであり、「喜雨」詩を宮廷詩人が歌う習慣は初唐の末、盛唐の始めの頃までだったと分かる。それと共に「喜雨」の詩題が歌う内容を特定しなくなった。つまり雨を喜ぶ内容が多様化したことが窺える。その象徴的な作品が、盛唐の玄宗の「同劉冕喜雨」詩である。

節變寒初盡 節變じて寒初めて盡き

時和氣已春 時和して氣已に春なり

繁雲先合寸 繁雲先ず寸を合し

膏雨自依旬 膏雨自ら旬に依る

颯颯飛平野 颯颯として平野に飛び

霏霏靜暗塵 霏霏として暗塵を靜む

懸知花葉意 懸かに知る花葉の意

朝夕望中新 朝夕 望中新たなり

農事には觸れていない。この詩に奉和した張說の「奉和聖製同劉冕喜雨應制」詩も同様である。なお表には載せなかったが玄宗に「喜雨」詩の内容を歌った「喜雨賦」があり、これに奉和した「奉和聖製喜雨賦」が張說、韓休、徐安貞、賈登、李宙の五人にある。玄宗の初期のころはまだ「喜雨」詩の習慣があったので玄宗は「賦」の形式で「喜雨」の内容を歌ったと思われる。

同じく盛唐の頃には、一、二、三の分類に入らない「喜雨」詩も出現した。杜甫の廣德元年（七六三）梓州での「喜雨」詩である。

春旱天地昏 春旱天地昏く

日色赤如血 日色赤きこと血の如し

農事都已休 農事都て已に休す

兵戎況駭屑 兵戎況んや駭屑たるを

巴人困軍須 巴人軍須に困しむ

慟哭厚土熱 慟哭す厚土の熱きに

滄江夜來雨 滄江夜來の雨

眞宰罪一雪 眞宰罪一雪す

穀根小蘇息 穀根小しく蘇息するも

滄氣終不滅 滄氣終に滅せず

何由見寧歲 何に由りてか寧歲を見、

解我憂思結 我が憂思の結ばれしを解かん

崢嶸群山雲 崢嶸たる群山の雲

交會未斷絶 交會未だ斷絶せず

安得鞭雷公 安んぞ雷公を鞭うちて

滂沱洗吳越 滂沱として吳越を洗うを得ん

最後の所に、原注「時浙右多盜賊」とある。

天下に早魃と兵亂と二つの困難があり、降雨で農作物は少しは助かったが、滄氣は消えず兵亂は依然としてあるから、雨を滂沱と降らして、滄氣を洗い流したい、という。滄氣は悪い氣、『漢書』五行志に「氣相傷謂之滄」とある。この「喜雨」詩は杜甫の天子を助けて國家の爲に盡力したいと歌う詩だが、雨に對して、雨は農事に良いものであると同時にれ氣を洗い流すものという見方をしている。こういった雨に對する見方は従来の「喜雨」詩の枠を超えている。また、八句目の「眞宰罪一雪」の句は、眞宰（老莊學でいう天）は雨を降らせたのでその罪は雪がれた、というのだが、裏を返せば早魃を起こした罪は眞宰にある、という意味になる。早魃は天子の不徳に天が感應して起こす災いと考えられていたから、これは眞宰という道家の語を使ってはいるが天子批判、政治批判に通ずる。古來、早魃になると、天子は

雨乞いの一環としてその有徳ぶりを天に訴える爲に様々な「善政」を施し、六朝時代及び傳統的な「喜雨」詩は、そういう早魃對策としての有徳ぶりや「善政」をA、天（天子）の徳が高いお陰でと詠じ、雨が降ったので五穀豊穰、天下太平であろうと祝賀してきた。この習慣が初唐まで續いていたことは李嶠の「晚秋喜雨」の序文からも窺える。

咸亨元年、自四月不雨、至于九月、王畿之内嘉穀不滋、君子小人惶惶如也、天子慮深求瘼、念在責躬、避寢損膳、錄冤弛役……至誠斯感、靈眷有融、爰降甘澤、大拯災亢……（咸亨元年、四月より雨ふらず、九月に至る、王畿の内、嘉穀滋らず、君子小人惶惶如なり、天子慮深く瘼を求め、念は責躬に在り、寢を避け膳を損い、冤を録し役を弛くす……至誠斯に感じ、靈は融有るを眷て、爰に甘澤を降らし、大いに災亢を拯う……）

杜甫のこの「喜雨」詩は、早魃はおさまって天子の不徳は雪がれたが、今はそれだけでは天下太平にならない、と傳統的な「喜雨」詩を大きく超えた方向へ展開しているわけである。こういった方向を繼承したのが白樂天の「賀雨」（五言六十四句）詩と思われるが「喜雨」詩はこれ以上發展しなかった。

また、一に分類される文宗の「暮春喜雨詩」は傳統的な「喜雨」詩の内容を歌うものだが天子自作の「喜雨」詩であり、「喜雨」詩は本來宮廷詩人的立場の詩人が詠じるものであるから、これは唐代化された「喜雨」詩といえる。天子自ら豊作を言祝ぐ詩を歌う習慣は「喜雨」詩に限らないが、六朝時代には見られないからである。

天子自ら豊作を言祝ぐ詩を歌うといった現象の源を求めると初唐の太宗の「詠雨」詩がある。「喜雨」といわないで「喜雨」詩の内容を

歌っている。

和氣吹綠野 和氣綠野を吹き

梅雨灑芳田 梅雨芳田に灑ぐ

新流添舊澗 新流舊澗に添い

宿霧足朝煙 宿霧朝煙に足る

雁濕行無次 雁濕りて行に次無く

花霑色更鮮 花霑いて色更に鮮やかなり

對此欣登歲 此に對して登歲を欣び

披襟弄五弦 襟を披きて五弦を弄す

五句目の雁の句は庾信の「奉和趙王喜雨」詩の「濕雁斷行來」を意識したもの。最後の二句は、實りの秋に豊作が期待できるのが嬉しく、舜のように五弦の琴を弾じよう、という。八句目の「弄五弦」は『韓詩外傳』に

舜彈五弦之琴、以歌南風、而天下治。

とあるのを踏まえる。この詩に見る雨に對する認識は六朝時代の「喜雨」詩と同じである。ただ作者が天子であるから「喜雨」詩のA・天(天子)の徳を稱える表現の部分は無く、舜の典故を使った自畫自贊の形になっている。太宗が「詠雨」詩を作った理由は二つ考えられる。一つは、太宗には「秋日學庾信體」(五言十句)という作品があり、北周の庾信の詩の影響を受けていたと推察されるが、その庾信に先に見た「喜雨」と詩題にしないで「喜雨」の内容を詠じた「對雨」詩があるのでこれに倣ったと考えられる。もう一つは、初唐の頃はまだ宮廷詩人的立場の詩人が「喜雨」詩を歌う習慣があったので天子である太宗は「喜雨」と詩題にしなかった。いずれにしても、天子自ら豊作を言祝ぐ詩は太宗から始まったといえよう。そして太宗にはこれ

豊作を言祝ぐ詩

を明示する「喜雪」詩がある。「喜雪」詩という詩題からも「喜雨」詩を意識したものとと思われるので次に検討してみる。

四 「喜雪」詩について

(一)太宗の「喜雪」詩について

太宗の「喜雪」詩(五言二四句)を見ると雪は豊作の瑞祥を示してめでたい、という。

……十六句省略……

斷續氣將沈、斷續して氣將に沈まんとし

徘徊歲云暮 徘徊して歲云に暮れる

懷珍愧隱德、珍を懷い隱德に愧じ

表瑞行豊年 瑞を表して豊年を行つ

藥閑飛禁苑、藥は閑かに禁苑に飛び

鶴處舞伊川 鶴は處りて伊川に舞う

儻詠幽蘭曲 儻し幽蘭曲を詠うなら

同權黃竹篇 同に黃竹篇を權ばん

省略した部分は雪の紋景。歳も暮れようとする時、(雪は)珍を懷い(豊作を賀す大地の)隱德に愧じ、(豊作の)瑞兆を表して豊年を行つ。藥はしずかに禁苑に飛び、鶴は處りて伊川に舞う、もし高尚な幽蘭曲を詠うなら、ともに黃竹篇を權ぼう。

隱德は大地の徳。幽蘭曲は高尚な曲、また白雪の語を引き出す。戰國時代の楚の宋玉の「諷賦」に

臣援琴而鼓之、爲幽蘭白雪之曲。

とあり、白雪は『戰國策』楚の「宋玉對楚王問」の次の故事で知られる曲名でもある。

客有歌于郢中者……其爲陽春白雪、國中屬而和者、不過數十人。

黃竹篇は周の穆王が作った詩の篇名、天子が民を哀れむ詩。『穆天子傳』にある穆王が獵に出掛けた時の次の故事を踏まえる。

日中大寒、北風雨雪、有凍人、天子作詩三章、以哀民、詞曰我徂黃竹……(日中大いに寒く、北風雪を雨らし、凍人有り、天子詩三章を作り、以て民を哀れむ、詞に曰う我は黃竹を徂く……)

「喜雪」詩の引用部分は宋の謝惠連の「雪賦」の次の部分を意識している。

岐昌發詠於來思、岐昌は詠を來思に發し

姬滿申歌於黃竹、姬滿は歌を黃竹に申ぬ

曹風以麻衣比色、曹風は麻衣を以て色を比へ

楚謠以幽蘭儷曲、楚謠は幽蘭を以て曲を儷ぶ

盈尺則呈瑞於豐年、尺に盈つれば則ち瑞を豐年に呈し

表丈則表沓於陰德、丈に表れば則ち沓を陰德に表す

太宗の「喜雪」詩に見る雪に對する認識は、傳統的な「喜雨」詩の雨に對する認識と同じである。しかし、最後の二句の幽蘭曲も黃竹篇も豊作とは直接結び付かない。早魃の時の雨は誰にとつてもめでたいものであるが、雪の場合は黃竹篇の典據にもあるように「日中大寒、北風雨雪、有凍人」ということもある。太宗は、自分が民を哀れむ天子であることを示す爲に黃竹篇とともに懼ほう、と結んだと思われるが、それならば、なぜこの詩を「喜雪」という詩題にしたのであろうか、疑問が残る。そこで、先ず雪は豐年の瑞兆を示してめでたいものと歌う詩の先例から見てみることにする。

(一) 雪は豐年の瑞兆と歌う詩の先例

『全漢三國晉南北朝詩』に據つて雪を詩題に持つ作品を検すると三

三首あるが(「雨雪曲」は除く)、「喜雪」という詩題の作品はない。また詠じる内容の殆どは雪を美しく描くことに終始した敘景詩である。その中で雪は豐年の瑞兆と歌う詩は次の四首である。

①梁の庾肩吾の「詠花雪」(五言八句)

瑞雪墜堯年、瑞雪は堯年に墜ち

因風入綺錢、風に因り綺錢に入る

……中略……

已飄黃竹路、已に黃竹路に飄れば

共慶白渠田、共に白渠田を慶さん

黃竹路は天子が民を哀れむ路。白渠田は豊作を齎す田畑。『漢書』溝洫志の記事に據る。

太始二年、趙中大夫白公復奏穿渠……因名曰白渠。民得其饒、歌之曰……涇水一石、其泥數斗、且漑且糞、長我禾黍、衣食京師、億萬之口、言此兩渠饒也(太始二年、趙の中大夫白公復た渠を穿たんと奏す……因りて名すけて曰く白渠、民其の饒を得て、之を歌いて曰う……涇水一石、其の泥數斗、且つ漑ぎ且つ糞う、我が禾黍を長す、京師に衣食する、億萬の口、此の兩渠の饒さを言うなり)

②陳の徐陵の「詠雪」(五言八句)

三農喜盈尺、三農尺に盈つるを喜び

六出舞崇花、六出崇花を舞わす

三農は農民。『周禮』天官・太宰に

三農生九穀、(三農九穀を生ず)

とあり註に「三農、平地、山、澤也」とある。盈尺は雪が一尺も積も

ること、豊作の瑞兆。謝惠連の「雪賦」の『文選』五臣註に、
向日、隱公之時、大雪平地一尺、是歲大熟爲豊年也（向日う、隱公
の時、大いに雪ふり平地一尺、是歲大いに熟り、豊年と爲るなり）
とある。六出は雪の異名。

③陳の張正見の「詠雪應衡陽王教」（五言八句）

九冬飄遠雪 九冬遠雪飄り

六出表豊年 六出豊年を表す

④隋から唐代の釋慧淨の「於冬日普光寺臥疾值雪簡諸舊遊」（五言十
二句）

徒賞豊年瑞、徒に賞す豊年の瑞

沈憂終自憐、沈憂して終に自ら憐む

この四首はいずれも雪を豊作の瑞兆として歌うものであるが、庾肩吾
の「詠花雪」詩に、太宗の「喜雪」詩の結びの句に使われた「黄竹」
の典故の先例を見ることが出来る。ここでは豊作を齎す田「白渠田」
と天子が民を哀れむ路「黄竹路」を對句仕立にしてそこに瑞雪が降る
ということと慈悲深い天子の徳を稱える表現として使っている。庾肩
吾は宮廷詩人的立場の詩人であるからこういった修辭は自然に發想さ
れたと推察されるが、實際にも梁朝にも梁朝は雪害に見舞われている。『梁書』
武帝紀に次の記事がある。

普通二年三月、大雪、平地三尺

大同十年冬十二月、大雪平地三尺

「詠花雪」詩の制作年代は特定出来ないで黄竹の典故を用いたこと
と直接關係があるか不明だが、その背景としての關連性は考えられ

豊作を言祝ぐ詩

る。そこで太宗の場合を見るに『舊唐書』太宗本紀には旱魃の記録は
あつても、雪に關する記事は無い。唐朝に大雪が降つてもいないのに
太宗はなぜ「黄竹」の典故を使ったのであろうか。太宗の「喜雪」詩
に奉和した詩を検討してみることとする。

(三)太宗の「喜雪」詩に奉和した詩

太宗の「喜雪」詩に奉和した詩は二首ある。先ず、宗楚客の「奉和
聖製喜雪應制」（七言律詩）を見ると、

飄飄瑞雪下山川 飄飄たる瑞雪山川に下り

散漫輕飛集九埏 散漫輕飛して九埏に集る

……四句省略……

共荷神功萬庾積 共に神功を荷い萬庾積み

終朝聖壽百千年 終に朝せん聖壽百千年

とある。省略した部分は雪の紋景。九埏は地の果て。庾は米藏。

瑞雪が山川に降り、地の果てに集まった……（雪は太宗と）ともに

神業のような功で多くの米藏を積み上げ、太宗の御世は長く續くであ
らう、という。

次に許敬宗の「奉和喜雪應制」（五言二二句）を見ると、

……八句省略……

伏檻觀花瑞、檻に伏して花瑞を觀て

稱觴慶冬積、觴を稱して冬積を慶さん

……以下省略……

とある。省略した部分は雪の紋景。冬積は熟語としての用例はない。

冬については『後漢書』張純傳に

冬者、五穀成熟、物備禮成

とある。これに據れば五穀が成熟し物が備わり禮が成る冬が積もつて

めでたい、という意味になる。或は「冬之德寒」(呂覽)貴信)の語がある。これならば寒さが積もつてめでたい、となる。欄干に伏して雪花の瑞兆を觀て、觴を擧げて冬の積るのを慶ぶ。

この二首の「喜雪」詩は、どちらも雪を瑞雪と稱しているが、特に許敬宗の「奉和喜雪應制」は、豊作の瑞兆とは明白には表現していない。そこで、觀點を變えて、太宗達雪を瑞雪と喜ぶと思われる理由を他に求めると、『舊唐書』突厥頡利可汗傳に次の記事がある。

貞觀元年……其國大雪、平地數尺、羊馬皆死、人大飢……三年……頻年大雪、六畜多死、國中大饑、頡利用度不給、復重斂諸部、由是下不堪命、内外多叛之。

突厥は貞觀元年(三年)まで大雪が續き國力が大いに弱くなつていた。一方、『舊唐書』の太宗本紀の貞觀三年(四年)の記載に次の記事がある。

三年冬十一月、李世勣……李靖……以擊突厥
十二月、突利可汗來奔。
四年春正月、李靖大破突厥、

二月、李靖又破突厥于陰山、頡利可汗輕騎遠遁。

三月、張寶相生擒頡利可汗、獻於京師……以俘頡利告於太廟。

夏四月、軍吏執頡利以獻捷。自是西北諸蕃咸請上尊號爲天可汗。隋末の混亂から唐代にかけて突厥はしばしば中國を荒らし、太宗が即位した時は長安の近くまで侵攻し唐の王朝を悩ましていた。だから、貞觀元年から三年の間に突厥に降つて突厥の國力を弱らせた大雪は、太宗達唐朝の人にとっては實に瑞雪と喜ぶに十分な雪だったと考えられる。こう見ると宗楚客の詩の歌い出しが、瑞雪が九挺(地の果て)に集つた、という表現であるのも、太宗が「黃竹」の典故を使つた

のも了解出来る。太宗の「喜雪」詩の制作年代は特定出来ないが、少なくとも即位後の太宗にとって雪は、豊作の瑞兆であるからだけでなく、突厥を破る助けになつたと更に嬉しく喜ばしいものと認識されていたと推量される。つまり六朝以來歌われている雪は豊作の瑞兆を示してめでたいと歌う詩に、太宗が前例の無い「喜雪」詩という詩題を立題したのは、その根底に突厥の國力を弱らせた雪を喜ぶという氣持があつたのではないか、と思われるのである。

太宗の「喜雪」詩を嚆矢として「喜雪」詩は中唐の頃まで以下の如く歌い繼がれている。

(四) 唐代の「喜雪」詩について

考察の便宜のため、唐代の「喜雪」詩を一覽表にすると次の如くなる。

- 太宗 [喜雪] (五言二四句)
- 宗楚客 [奉和聖製喜雪應制] (七律)
- 許敬宗 [奉和喜雪應制] (五言二二句)
- 玄宗 [校獵義成喜逢大雪率題九韻以示群官] (五言十八句)
- [野次喜雪] (五律)
- [喜雪] (五言十二句)
- 張說 [奉和聖製義成校獵喜雪應制] (五言十八句)
- [奉和聖製野次喜雪應制] (五律)
- [奉和聖製喜雪應制] (五言十二句)
- 徐安貞 [奉和喜雪應制] (七律)
- 朱灣 [長安喜雪] (七律)、一本に陳羽の「喜雪上竇相公」の作とする
- 韓愈 [喜雪獻裴尚書] (五言五二句)

李商隱 「喜雪」(五言排律)

★農事に關係ない「喜雪」詩

★張九齡 「和姚公從幸溫泉喜雪」(五律)

★蘇綰 「奉和姚令公駕從幸湯湯喜雪應制」(五律)

★蘇頌 「扈從溫泉奉和姚令公喜雪」(五律)

★白樂天 「房家夜宴喜雪戲贈主人」(七律)

★白樂天 「西樓喜雪命宴」(五言排律)

玄宗に三首の「喜雪」詩があるので以下に見てみると次の如くである。²⁾

①、「校獵義成喜逢大雪九韻以示群官」

……十四句省略……

既欣盈尺兆、既に尺に盈つる兆を欣び

復憶磻谿便 復た憶う磻谿の便

歲豐將遇賢、歲豐將に賢に遇わんとす

俱荷皇天眷 俱に荷わん皇天の眷

省略した部分は狩りの様子と雪の紋景。磻谿は谷川の名、太公望・呂尙が釣りをしていた場所。雪が豊作の瑞兆を示してめでたいこの時、賢人と皇天の恵みを擔おう、という。

これに奉和した張説の「奉和聖製義成校獵喜雪應制」詩は次の如くである。

……十四句省略……

星爲吉符老 星は吉符の老と爲り

雪作豊年慶 雪は豊年の慶を作す

喜聽行獵詩、喜び聽く行獵の詩

威神入軍令 威神軍令に入る

豊作を言祝ぐ詩

②、「野次喜雪」

……六句省略……

爲知勤恤意、勤恤の意を知らしむ爲に

先此示年豊 先ず此に年豊を示す

省略した部分は寒々しい阜と雪の紋景。勤恤はつとめあわれむ意。

『左傳』哀公・元年に

勤恤其民、與之勞逸(其の民を勤恤し、之と與に勞逸す)

とある。雪は勤恤の意を知らせるために、先ず豊作をもって示された、という。

これに奉和した張説の「奉和聖製野次喜雪應制」詩は次の如くである。

……六句省略……

欲驗豊年象、豊年の象を驗さんと欲して

飄搖仙藻來 飄搖仙藻來る

仙藻は雪の異名。

③、「喜雪」詩。

日觀卜先征、日觀征くに先じて卜せば

時巡順物情 時巡物情に順う

……六句省略……

既親膚先合、既に膚の先ず合するを親て

還欣尺有盈 還た尺の盈つる有るを欣ぶ

登封何以報、登封何いて報ぜん

因此謝功成 此に因りて功の成るを謝す

日觀は泰山の東峰。泰山に時巡した時、雪が豊作の瑞兆を示している

ので、天子たる玄宗の功績は成った、と天に報告しよう、という。

これに奉和した張説の「奉和聖製喜雪應制」詩は次の如くである。

聖徳與天同、聖徳は天と同じく

封禪欲報功 封禪に功を報ぜんと欲す

詔書期日下、詔書日を期して下せば

靈感應時通 靈感時に應じて通す

觸石雲呈瑞 石に觸れて雲は瑞を呈し

含花雪告豊 花を含んで雪は豊を告ぐ

……以下六句省略……

玄宗の三首の「喜雪」詩が歌われたのは、狩の途中、野次した時、泰山に登封した時と行旅の途中であるから客觀的に見れば雪を喜べる状況ではない。しかしいずれの詩も雪は豊作の瑞兆を示してめでたいものと歌い、奉和した張説の「喜雪」詩も天子の徳を稱えつつそれに照應した内容を歌っている。徐安貞は玄宗の時代の詩人であるが、その「奉和喜雪應制」(七言律詩)も天子の徳を稱え豊作を言祝ぐ詩になっている。六句で雪の紋景、最後の二句で、次のように結ぶ。

自有三農歌帝力、自ら三農帝力を歌う有り

還將萬庾荅堯心 還た將に萬庾堯心に荅えんとす

以上の詩から盛唐の頃には、「喜雪」という詩題が天子の徳を稱え(天子は自畫自賛して)豊作の瑞兆を示してめでたいという内容を歌う詩題になっていたことが分かる。しかし中唐以後は天子の自作の「喜雪」詩が無く、また詩人達の「喜雪」詩の詩題も、「奉和聖製應制」、「奉和應制」といったものではなく、雪は豊作の瑞兆を示してめでたいと歌うだけになり、「喜雪」詩はこれ以上の發展はしなかった。なお、白樂天の二首の「喜雪」詩は忠州、蘇州に左遷されている

時の作である。

四 結 び

六朝時代に、「喜雨」詩という早魃の時に降雨を喜び豊作を言祝ぐといった内容に歌う内容を特定する詩題の作品群があることに着目して考察した結果、六朝時代から歌われた「喜雨」詩が唐代になって變化し、初唐から盛唐の始めころには傳統的な「喜雨」詩は歌われなくなった。これと平行するように太宗が「喜雪」詩を歌い始めた。これは雪は豊作の瑞兆を示してめでたいという内容を歌う詩であるが、この立題の背景には唐王朝を惱ましてきた突厥の國力を衰弱させた大雪を喜ぶ気持ちもあるのではないかと推察される。「喜雪」詩は六朝時代の「喜雨」詩の如く玄宗の時代にも同一詩題・内容で歌い繼がれたが、中唐以後は天子自作の「喜雨」詩もなく「喜雪」詩自體も發展しなかった。しかし白樂天の「喜雪」詩は別にして、「喜雪」詩は數多い雪の詩の中でその詠じる内容を豊作の瑞兆を示してめでたいという事に限定する特殊な詩題として一系列をなすものといえると思われる。また「喜雨」詩から「喜雪」詩へという豊作を言祝ぐ詩の流れから見ると、唐代には天子自ら豊作を言祝ぐ詩を作るようになったという新しい特徴が加わったが、その端を開いた太宗に大きな影響を與えたのが北周の庾信の作品であり、特に「對雨」詩には連結的な意義があると結論できると思われる。

注

(一) 太宗の「喜雪」詩の「懷珍愧隱徳」の珍の字は、諸本「珍」に作るが、この詩が謝惠連の「雪賦」を意識していると思えば「雪賦」に「表

丈則表於陰德」とあるので、「疹」の字が適當かと思われる。
(2) 玄宗の時代の雪の記録は『舊唐書』玄宗本紀に據れば次の如くである。

開元 三年十二月……是多無雪

九年十二月……是多無雪

十一年十一月……是月自京師至山東、淮南大雪、平地三尺余。

十七年十二月……是多無雪

十八年二月丙寅、大雨雪。

二十七年春正月乙巳、大雨雪

二十八年春正月壬寅……會大雪而罷

二十九年九月、大雨雪、稻禾偃折、

天寶 二年十二月……是多無雪